ソクラテスが対話する「ただ一人の人間」は「万人」に通じている

私は、ソクラテス、話し言葉と書き言葉の関係について、こう考えることがあります。

話し言葉によって相手とよく通じ合えるなら、確かに書き言葉が記憶を保存するのに最適であるという長所があっても、書き言葉が話し言葉を駆逐するほどに広まることはなかったでしょう。社会が複雑になり、各人の置かれている生活環境や考えかたの相違が拡大するにつれて、話し言葉による対話の方法だけでは、相手と通じ合うことがますます困難になっていった、と思われます。プラトンの対話篇に目を通して、あなたが対話を成り立たせて持続させることに、並々ならぬ神経と忍耐力を配っているのが感じられます。あなたが友人や論戦を得意とするソフィストや弁論家たちと議論しているときですら、そのように思われるのですから、もしあなたが一般人と対話するようなことがあれば、どのような対話になったであろうか——もちろん、対話相手として誰でもかまわないということではないでしょうが——、と思わず想像してしまいます。あなたは自分と異なる相手との議論によって、しばしばあなたの主張が遮られたり、非難されたりしながらも、そこで途切れないように非常に巧妙に一つずつ同意を得ながら相手の主張を發揮していますが、プラトンの対話篇では相手が途中で議論を投げ出して、あなたが途方に暮れる場面も何度ありました。あなたはポロスにむかって言ったように、「相手の君自身を、君というただ一人の人間を、ぼくの言うことに同意する証人としてしまう」ことに、議論のやりがいがあると思っていましたし、なにより議論については神からの使命を負っているかのように、へこたれず、強靱でやる気満々にいつも見えました。

しかしながら、そんなあなたはやはり特殊であり、例外であって、他の者たちはソフィストのように礼金目当てでなければ、議論なんぞ好んでしなかつたにちがいありません。それはもちろん、誰もあなたのような対話の技術をもたなかつたために、議論そのものが成立せず、したがって、相手に自分の考えを伝えることもできず、相手の考えを自分の中に受け入れることはできなかつたからでしょう。それでも自分の考えや主張を誰かに伝えようとするなら、書き言葉で文章にしていく以外に術はなかつたにちがいありません。文章なら対話のように相手から遮られることもないので、すいすいと自分の考えや主張を気持ちよく押し進めることができます。思うのですが、相手のある対話では自分の考えや主張を最後まで邪魔されずに述べることは難しいのに対して、相手のいない《内的対話》の文章ではそのような困難さは除去されているので、人々をもちや話し言葉による対話に向かわせずに、しだいに自分自身のみ語りかけていく《内的対話》の文章に傾斜させていくことになるのではありませんか。

あなたからすれば、自分と異なる相手と議論するのだから、相手によって自分の考え

や主張が遮られることになるのは当然のことであり、通じ合わない双方だからこそ、対話によってお互いに通じ合うようにしていく努力を最大に払わなければならないのでしよう。そのような困難な対話が成就した暁には、〈互いに心からの友となる〉という、なにも替えがたい最大の報酬が得られるわけです。対話こそは遠くの隣人を〈心からの友とする〉唯一の術ではないか、とあなたは考えています。しかし、一般人にとって、〈互いに心からの友〉が得られるどころか、対話や議論によって互いが互いをけなしあつて、決裂するに至る胸くその悪いものなのかもしれません。対話や議論に向かわなくなった人々は、自分にむかつて議論を繰り返す《内的対話》を書くことになるでしょう。そして文章を書いた以上は、人々に公開して反応を確かめたくなる欲求をどうしても抑えることができなくなるので、難癖をつけそうな人の目に入るのを避けて、できるだけ共感と賛同を得られそうな人の目に入るように仕向けるでしょう。なんのことはない、異なる相手との対話や議論から撤退した者たちが、書いている間は批判や反論を受けないですむ《内的対話》で膨らませた文章を一方的に公開して、自分の考えや主張を開陳する、というしだいなのです。具体的な目の前の相手との対話や議論を拒否しながら、自分が書いた文章の文句を言わない読者だけをいつも当てにするという、虫のよさが書き言葉には付きまといているようにみえます。

ソクラテスは〈互いに心からの友となる〉ために、「ただ一人の人間」との対話を求めて、激しい議論を展開しましたが、彼にとつての「ただ一人の人間」とは、彼より七、八〇年前のギリシャの哲学者ヘラクレイトスが言ったとされる、《私には一人でも万人に当たる、もし最高の者ならば》(『ソクラテス以前哲学者断片集』第Ⅰ分冊)という言葉と通底しているように感じます。ソクラテスは、自分は実体のない「大勢」は相手にせず、〈互いに心からの友となる〉可能性のある相手としか、議論も対話もしない、という態度を一貫させていたのが感じられます。その容赦のない対話の、自分にも相手にも目眩めくように思考の壁に喰い込み、深みへと到達していく様子は、まるで闘争のようにみえます。ソクラテス、あなたにとつて対話とか議論は、戦場における闘争に等しかったのではないでしょう。自分にも相手にも対立し、衝突し、争いながら、確かに勝利をめざしていたにちがいません。

ソフィストや弁論家にとつても、議論は紛れもなく自分が生き残るための闘争にほかなりませんでした。彼らは自らの職業を懸けて論争を激しく交わして、相手を完膚なきまでに打ち負かすことに専念したのです。もちろん、ソクラテスの対話にしても彼らの議論にしても、闘争という点では同じような激しさに見えていたでしょうし、相手を追い詰め、打ちのめそうとしている点では変わりはありませんでした。しかし、決定的に異なっていたのは、ソフィストや弁論家がやるかやられるかの、相手を打ちのめすことだけを目的としていたのに対して、ソクラテスの場合は、議論によって打ちのめされた相手が潔く自分の知の思い上がり認めて、ソクラテスと共に本当の知を探求するため、立ち上ることが目的だったのです。本当の知は議論によってやるかやられるかを

繰り返るげるところにあるのではなく、議論しあう双方が知に對して謙虚であることを自覚するところからはじまらなくてはならないものだったからです。

したがって、ソクラテスにとって議論の相手とは単なる多くの人々の中の一人ではなく、本当の知を共に探求する可能性を秘めた、真の友を得ることになる、かけがえのない「ただ一人の人間」にほかならなかつたでしょう。この「ただ一人の人間」の大きさの前では、「大勢」の人間などはとりとめのない、風の塵ちりのようなものであつたかもしれませぬ。ソクラテスが対話をしたり、議論をするとき、相手の中にこのような「ただ一人の人間」を見出しながら、行つていたことに十分注意しなければ、あなたにとつての対話や議論のもつ重みや意味は迫り上がつてこないでしょう。だから、ソクラテスの書き言葉に対する批判はこの文脈の中で考えられなくてはなりません。ソクラテスの対話が「ただ一人の人間」を獲得することに全力を注いでいたとすれば、そのような対話や議論から撤退したり、回避した書き言葉は当然ながら、「大勢」の人間、すなわち、「ただ一人の人間」もない「大勢」に向かうことを当初から宿命づけられていたのです。

このことが一体、どのような問題であるのか。ここでソクラテスに對してパイドロスが、書かれた言葉に慣れ親しむ者たちは、「生命をもち、魂をもった言葉」の「影」に打ち興じたり、感じ入つたり、振りまわされたりしているだけのことなのだ、と答えたことが想起されます。書き言葉が「生命をもち、魂をもった言葉」の「影」にすぎない、ということはどういうことなのか、を考えなくてはなりません。書き言葉が「ただ一人の人間」との議論を回避して、「大勢」の人間を相手にせざるをえなくなつたということによつて、生命も魂ももたない「大勢」の人間に向かつていくことになつた、ということではないのでしょうか。ここで「フィクション」という言葉を使えば、こう説明されるでしょう。

「ただ一人の人間」との対話や議論から身を退けて、書き言葉の世界に入つていくとき、書く者はフィクションの世界の住人になつてしまいます。『ブルーストとイカ』の著者が、《より正確な書き言葉で考えを記録しようとする書き手の努力のなかには内的対話が含まれている》と記していることは、要するに、人間は書くことによつてフィクションナルな対話や議論を展開するようになる存在である、ということなのです。書くことも読むこともフィクションナルな行為であり、それ故に、フィクションとしての書くことは、フィクションではありえない「ただ一人の人間」に向かつていくことはありませぬ。「ただ一人の人間」と《関係する》ことはできないからなのです。フィクションとしての書くことは、フィクションとしての読者に向かう以外になく、「ただ一人の人間」がない「大勢」にむかつて差し出されていくことになります。したがって、そこでの指標が、一人一人の読者——このこと自体ありえないことですが——にどのようによつて読まれたのか、ではなく、どれだけ多く読まれ（売れ）たのか、というフィクションナルな反応になるのは当然と言わざるをえませぬ。

パイドロスが語った「影」とは、フィクションということではないでしょうか。「影」はどこまでいっても、本体になることはなく、「影」にすぎないように、フィクションもフィクションでありつづけるしかありません。書き言葉そのものが話し言葉の「影」であるように、その「影」は対話の影としての《内的対話》を孕むこととなります。著者は、《子どもたちは携帯電話でメールを交わす。大人はeメールをやりとりする。おまけに、機械がしゃべり、読み、翻訳までしてくれる》という、《二一世紀のコミュニケーションにおけるインタラクティブな次元》の時代に私たちは至り、《こうした能力が、思考の真の批判的な吟味を十分反映する形で発達を続けている》とはとても言えなくなっている、と茫然とするのですが、こうした事態のルーツが書き言葉の増殖にあることは言うまでもありません。少なくとも話し言葉にルーツがないことは確かです。書き言葉という「影」の世界で生きることを一度覚えた人間が、「影」が「影」を次々と生みだし、フィクションがフィクションを次々と生みだす世界で生きるようになっていくのは、オリジナルな関係から言葉が切断されて、コピーのコピーがコピーされて無限増殖していくように、不可避だったと思われまます。

『プルーストとイカ』を更に追っていかなくてはなりません。

《ソクラテスがもっと微妙な問題として懸念していたのは、書かれた文章が真実と誤解される可能性である。書かれた文章は“あたかも知的であるように”見えるため、物事の真実により近いように思えるので、言葉が人々を欺いて、理解し始めたに過ぎない物事を理解したかのごとき浅はかな錯覚に陥らせてしまうのではないかと、ソクラテスは恐れたのだ。それは空虚な傲慢さにつながるだけで、何の進歩もなければ、何の役にも立たないというわけだ。この心配事に関しては、ソクラテスとキングスフィールド教授は、子どもたちがコンピュータの画面に何時間も貼り付いて、あらゆる種類の情報を吸収しはしているものの、理解しているとは限らない様子を目の当たりにしている現代の幾多の教師や親たちと、同病相憐れむ仲にある。このような不完全な学習は、真の知識と知恵と徳が唯一の価値ある教育目標だと考えていたソクラテスにとつては、言語道断であろう。》

そうではない、と首を横に振らなければなりません。ソクラテスが恐れたのは、書かれた文章がそうした《浅はかな錯覚に陥らせてしまう》こと以上に、錯覚が錯覚であることを書かれた文章が気づかせてくれないので、錯覚に陥ったまま生きることになってしまうというところにあるのです。《それは空虚な傲慢さにつながるだけで、何の進歩もなければ、何の役にも立たない》では済まされず、大きな害を被るでしょう。《不完全な学習》などという問題ではけっしてなく、害悪ある学習と言わなくてはなりません。なぜなら、真に理解していないのに理解したと思ひ込んでいる人間の組織的な振る舞いが、さまざまな社会的場面ですれほどの災いをもたらすことになるか、私たちは枚挙にいとまがないほどの実例を知っているし、元氣旺盛な無知ほど恐いものはないことを、思い知らされているからです。読字脳の奇跡的な発達に注目する著者に見れば、書

記言語の重要な魅力はソクラテスの容赦なき批判をもつてしても減じることはないので、著者の筆致からは、危機感がほとんど伝わってきません。

書き言葉に反対するソクラテスの第一の理由が、《書き言葉は柔軟性に欠ける》という問題であったなら、第二の反対理由は、《記憶を破壊する》という問題になります。著者はそこで、「現代のグアテマラでは、よそ者は物事を覚えるためではなく、覚えないために書き留めることに、マヤの人々は気付いている。」（ニコラス・オストラ）という文章を引用しています。もう一つ、プラトン『パイドロス』から、「文字を学んだら、学んだ者の心に忘れっぽさが植え付けられよう。書かれたものに頼って記憶力を使うことをやめ、内なる記憶に刻んだものからではなく、外の自分以外のものに刻みつけられた印によって思い出そうとするようになるからだ。あなたが発見したのは記憶の秘訣ではなく、想起の秘訣なのだ。」という文章を引用しています。「注・参考文献」には、この後者の引用文の前には、次の文章があることが記されています。それは、「ああ、類い希なる頭脳の持ち主テウトよ、技術と呼ばれるものを生み出す能力に恵まれた者と、生み出された技術がそれを使用する人々にいかなる害と益をもたらすかを判断できる者は別なのだ。今の我が身を振り返ってみるがよい。文字の生みの親であるが故の思い入れのせいで、文字の真の効用に反することを謳ったではないか。」という箇所です。

この省略された箇所も含めて読んでいくと、文章を書くという「能力に恵まれた者」と、その文章を読む「人々にいかなる害と益をもたらすかを判断できる者は別なのだ」と、読み取ることができます。テウトはこれらの引用文の前に、「王よ、この文字というものを学べば、エジプト人の知恵は増し、記憶力もよくなることでしよう。私が発見したのは記憶と知恵の秘訣なのです」と言ったことになっていますから、「文字の生みの親である」テウトは、文字の発明によって「知恵は増し、記憶力もよくなる」と判断したかもしれないが、「文字を学んだら、学んだ者の心に忘れっぽさが植え付けられ」て、「書かれたものに頼って記憶力を使うことをやめ、内なる記憶に刻んだものからではなく、外の自分以外のものに刻みつけられた印によって思い出そうとするようになる」だけではないか、というように読むことができます。記憶が破壊されることによって、文字を「使用する人々にいかなる害と益」がもたらされることになるのか、という問題を著者は考えなくてはなりません。

《ソクラテスが教育と哲学上の用途、真実を描き出す能力、思考と徳を洗練させる能力に見た、話し言葉と書き言葉の歴然とした相違は、リテラシーが記憶と個人の知識の内面化にもたらすだろうと懸念した変化に比べれば、ましと言えた。ソクラテスは、リテラシーが個人の記憶への負担を軽減することによって文化的記憶を大幅に増加させうるものであることは十分承知していたが、そうした記憶の取引がもたらす結果を望まなかったのである。

教育を受けた若いギリシヤ人たちは、口承された膨大な量の教材を暗記し、吟味することによって、社会の現存している文化的記憶をとどめるとともに、個人的知識と社会

的知識を高めていった。ソクラテスが、彼の裁判を行った裁判官たちとは違って、このシステムをそっくりそのまま尊重したのは、文化の保存に対する配慮からというより、むしろ、個人的知識の基盤を形成するにふさわしい厳密さを期待できるのは暗記するという非常に努力を要するプロセスのみであり、そうして形成した知識基盤は教師との対話のなかで磨いていくことができるという信念を抱いていたからだ。こうした言語と記憶と知識をつなぎ合わせた幅広い視点から、書記言語は記憶の「秘訣」ではなく、記憶の破壊をもたらさしめるものと、ソクラテスは結論した。文化的記憶を保存するうえで書字のほうが有利であることに議論の余地はないとわかっているにもかかわらず、個人記憶の記憶力と、それが知識の吟味と具現化に担う役割とを保つことが重要だったのだ。

この箇所では、《リテラシーが個人の記憶への負担を軽減することによって文化的記憶を大幅に増加させる》ことを望まなかった、と記されているだけで、なぜ、望まなかったのかについての理由は述べられていません。書記言語が《記憶の「秘訣」ではなく、記憶の破壊をもたらさしめるものと、ソクラテスは結論した》としながらも、では記憶の破壊が人間になにをもたらすのか、については説明されていないのです。代わりにソクラテスが暗記を重視したことが強調されていますが、ソクラテスが単なる暗記を重要だと思っていたということには首をひねります。プラトンの対話篇からみるかぎり、理解することと記憶することとは結びついていたはずで、文化的記憶が栄える一方で、個人の記憶力が衰退していくばかりであるなら、個人の記憶力が乏しくなった人間が、その膨大な文化的記憶をどのように受容することができるのか、という問題も出てくるでしょうが、そんな問題も提出されていません。個人が記憶することが重要なのは、記憶されるさまざまな事柄がそのまますぐに取り出されるからである以上に、記憶された事柄同士が結びつけられて、ひらめきと意外な考えを切り拓く神秘が起こりうるからであって、記憶力が衰退するなかでは、そんな跳躍は起こりえないでしょう。

暗記することの問題について著者は、《いよいよ暗記することが少なくなるこれからの世代にとって、何を意味するのだろうか？ そらで言える詩の数がさらに減るか、それとも、九九さえ満足に言えなくなるのだろうか？ 停電したり、コンピュータが故障したり、ロケットのシステムが誤動作したりしたら、こうした子どもたちはどうなってしまうのか？ 現代の子どもたちと古代ギリシャの子どもたちの言語と長期記憶を結ぶ脳の経路にはどのような違いがあるのだろうか？》と矢継ぎ早に問いかけながら、八六歳になる自分のユダヤ系の祖母について、考えてみようとしています。

《……ロツテ・ノームなら絶対、これからの世代に面食らうはずだ。孫たちが際限なく喜ぶものだから、機会さえあれば、その場にぴったりのリルケの三行詩やゲーテの一節、ちよっと品のないメリック（訳注：滑稽な五行詩）を暗唱して聞かせるのだ。いつだったか、ねたみ心が爆発して、どうやってそんなにたくさんさんの詩やジョークを覚えられたのと、ロツテに尋ねたことがある。彼女の答えは単純なものだった。「いつか強制収容所に入れられても、誰にも取り上げられないものが何か欲しいとずっと思っていたの

よ」。》

著者はせっかく自分の祖母が詩を暗唱する理由を聞き出しながら、「誰にも取り上げられないもの」としての暗唱した詩に全く触れていないので、私が代わりに《記憶力は私たちの人生にいかなる場所を占めているか、この資質が世代を重ねるごとに衰えていくことは最終的には何を意味するか》という問いのほうへ、駆けだしていかねばなりません。著者の祖母がその理由の中でなにを言おうとしていたのか、をじっくりと聞き取ることが重要でしょう。彼女はこう言おうとしていたのではないのでしょうか。いくら手帳やノートに自分の好きな詩をたくさん書き写しても、強制収容所に入れられるようなことがあれば、すべて取り上げられてしまうから、自分の心に書き刻んでしまえば、「誰にも取り上げられない」でしょ、と。「誰にも取り上げられない」ということは、自分にも「取り上げられない」ことを意味します。自分の心に言葉を書き刻むことは、心に刻まれた言葉と共に生きていくことにほかなりません。強制収容所であろうと、どこであろうと、心の中の言葉と共に生涯を生きていくことになります。そしてどのようなきにでも、自由自在に心から言葉を引き出して、まるで自分の言葉であるかのように、口ずさむことができるのです。これに優る財産はどこにもないでしょう。真珠のネックレスや金のブローチなどはいっつかは失われますが、いったん心に刻まれた言葉は自分が死なないかぎりはいつまでも自分に囁きかけてくれるのですから。

心の中に刻まれた言葉の効用は、思いっくだけでも、二つあります。一つは、自分に語りかけてくれる存在を心の中に持つことになりす。このことは、もはや自分は孤独ではなくなったことを意味します。楽しいときに口ずさむことができるだけでなく、苦しいときにも言葉のほうから語りかけて、奮い立たせてくれるにちがいありません。もう一つの効用は、心に刻まれた言葉は、自分が発したくなる言葉を新しく次々と生みだしていくことがあります。自分がさまざまな言葉を欲求するようになるだけでなく、心に刻まれた言葉それ自体もさまざまな言葉を喚び込もうとするからです。心の中でさまざまな言葉が多彩に繁茂していく光景が目に見え始めるようになります。彼女が素朴に「誰にも取り上げられないものが何か欲しいとずっと思っていた」と打ち明けているだけに見えますが、心の中に刻まれた言葉は、彼女が孫たちに機会さえあれば、《暗唱して聞かせる》ように、他人の心に植えつけられていくことも起こります。つまり、言葉が自分の心と相手の心の架け橋となる役割も果たしてくれるのです。

《この個人の記憶力の喪失に対するソクラテスの反応を鮮明に示す例がある。パイドロスがリュシアスの演説を暗唱しようとして、おそらく世界初のカンニング・ペーパーを覗いている現場をソクラテスがつかまえた時の話だ。パイドロスは万一忘れた時のためにと、演説を書き留めて、チュニツクの内側に隠し持っていた。弟子の挙動に不審を抱いたソクラテスは、書き言葉の性質と、それが教育には情けないほど役立たないものであることを、痛烈に罵倒し始めた。文字を書くことを、実物そっくりに見えるだけの美しい絵画になぞらえて、こう言ったのである。「しかし、絵に問いかけても、絵は堂々

と沈黙を続けるばかりだ。書かれた文字も同じこと。知性を持つがごとく、君に語りかけているように見えるかもしれないが、教えを受けたかと思つて、文字が語っていることについて問いかけても、同じことを何度でも永遠に繰り返すだけだ。

パイドロスには同情するしかないが、ソクラテスの怒りの矛先が向けられたのは彼だけではない。『プロタゴラス』では、「パピルスの巻物のように」物事を考え、「君の問いかけに答えるどころか、自分に問いかけることもできない」人々を情け容赦なくこき下ろしている。》

ここでソクラテスは、書かれた文字との対話が成り立たないことを説明しているのです。なぜなら、書かれた文字はけつして質問を受けつけないからです。書かれた文字は「知性を持つがごとく、君に語りかけているように見える」だけで、誰にむかつても、「同じことを何度でも永遠に繰り返すだけ」なのです。読む側がそのことに耐えられなくなるなら、書かれた文字（を書き留めているペーパーか冊子）を放り投げるか、その前から立ち去る以外にありません。文字を書いた者はしかし、自分の手で書き綴った文章に対して読む側の一人一人がどのように振る舞うことになったかを、知ることはできませんし、知る必要もないのです。なぜなら、書かれた文字はなにも言わずに黙つて読んでくれることだけを期待しているからです。

紙に書き込まれていく言葉は紙に属し、心の中に書き込まれていく言葉は心に属しています。したがつて、紙に書き込まれた言葉は次々と紙に書き込まれていくでしょうが、心の中に書き込まれた言葉も次々と心の中に書き込まれていきます。同じ言葉であるようにみえても、紙に書かれた文字と心の中に書き込まれた言葉とは根本的に異なるのです。パイドロスが言つたように、言葉と言葉の「影」であることとの決定的な違いです。ソクラテスがパイドロスに怒つたとすれば、それは、君は言葉の「影」などに頼るな、ということだったのでしょう。著者の祖母が自分の心の中に暗唱して書き刻んだ詩も、もちろん、書かれた文字を視覚に映しとつたものであつたでしょうが、彼女は書かれた文字の詩を、暗唱することによつて自分の心の中に移し替えたのです。そのようにして、書かれた文字に息を吹き込むことができますが、文字を目で追つていくだけでは、文字が語っていることを目でなぞつていくだけのことになりません。

ソクラテスが、≪パピルスの巻物のように「物事を考え、「君の問いかけに答えるどころか、自分に問いかけることもできない」人々を情け容赦なくこき下ろしている」という記述にしても、そのような人々は、言葉が自分と相手との間に置かれて、言葉を交わしながら、二人の間に深く横たわっている溝にどのような橋を架けていくか、という問題に双方が頭をひねるという作業に無縁であり、自分の前にいる相手は自分の言葉を一方的に押しつけられる存在としてしかみていない、ということを示しているのです。まるで書かれた文字のように存在している人々であり、相手に語りかける言葉や、相手から語りかけられる言葉をもつて生きているとは到底考えられない人々である、ということになるでしょう。

著者は、ソクラテスが書かれた文字に反対する第三の理由として、《知識を使いこなす能力を失わせる》という点を挙げています。

《突き詰めて言うなら、ソクラテスは読字を恐れていたわけではない。彼が恐れたのは、過剰な知識とそれが必然的にもたらす結果——表面的な理解しかできないことである。正しい教育を受けていない者が文字を読むのは、知識を使いこなす能力をいつの間にか、取り返しの付かない形で失ってしまうことにはかならないからだ。ソクラテスの言葉を借りよう。「物事をひとたび書き留めてしまうと、書かれた文章は、いかなるものであるようと、至るところに漂い出して、それを理解できる者だけでなく、関わりのない者の手にまで渡ってしまう。文章には、それを読むにふさわしい者とふさわしくない者をどうやって見分ければよいか、知る由もないからだ。しかも、誤用されたり、悪用されたりしたら、文章自体には防衛する術も自力で切り抜ける術もないのだから、必ず、その生みの親が救いの手を差し伸べることになる》。

ソクラテスのいつもながらのユーモアとスパイスの効いた皮肉の裏には、教師や社会の指導を受けずに得たりテラシーが知識への危険なアクセスを許してしまうことへの深い懸念が隠されている。読字はソクラテスに、新バージョンのパンドラの箱を与えた。書記言語がパンドラの箱から飛び去ってしまったら、何を書こうと、誰がそれを読もうと、読み手がどう解釈しようと、おかまいなしになってしまうのだ。》

この著者の記述については、「弁論術はなにか」をめぐって、ソクラテスとゴルギアスが行った問答を取り出して考えてみます。「すぐれた弁論家」として自分を誇るゴルギアスに、ソクラテスは、「あなたは、自分以外の人々をも、そういうあなたと同じような人間に仕立てることができるといふことですね、と尋ね、弁論術という技術をめぐって、議論が繰りひろげられます。ゴルギアスが、「わたしの言うのは、言論の力で人を説得する能力のこと、すなわち、法廷では裁判官を説得し、政務審議会や国民議会ではそれぞれの議員たちを説得し、また、その他およそ国民的集会のあるところ、あらゆるばあいに、言論を駆使して説得することのできる能力のことだ。そしてじじつ、この能力さえ身につけているならば、君は、医者であろうが体操教師であろうが、みな奴隷として配下に従えることになるのは必定。」と答えると、「しからは弁論術のおこなう説得とは、いかなる説得であり、何に関する説得なのか」と、ソクラテスが問います。

ゴルギアスが、「それは、裁判の法廷その他、大勢の人間が集まるばあいに効果を發揮するような説得であ」り、「その説得は、正しいことがらや不正なことがらに関してなされるものである」と答えると、ソクラテスは「学んでしまっている」と「信じこんでいる」こととは、「すなわち、学識と信念」は異なっているとすれば、弁論術による説得とは、「知識を抜きにして信じこむことだけが結果として起こるような説得」か、「それとも、その説得の結果として知識も与えられるものなの」か、と問うていきます。「信じこむことだけが結果として起こるような説得だ」とゴルギアスが答えると、ソクラテスは、「その説得なるものは、どうやら、人にそれと信じこませるだけのことなのであ

って、正と不正の何たるかを知識として教えるような説得ではないわけですね？」と確認しながら、こう続けます。

「だからまた、弁論家とは、法廷その他、大勢の人間の集まりを相手にして何が正しく何が不正であるかを知識として教える人ではなくて、ただ、それと信じこませるだけの人だということにもなりますね？　じつさい、相手がそんなにたくさんの方の集まりだとしたら、わずかの時間のうちにかくも重大なことがらについて知識を授けるなどということは、不可能でしょうからね。」私はこの言葉から、ソクラテスが自分の裁判で五百人もの陪審員を相手にして、「わずかの時間のうちにかくも重大なことがらについて知識を授けるなど」ということは、不可能「な局面に立たされねばならなかった彼の心中を思いやると、なんともいえない気持ちになります。まあ、その「不可能」な結果を強いられて、有罪判決を受け、死刑を余儀なくされねばならなかったのですが、私には有罪判決や死刑などよりも、裁判でゴルギアスなどの弁論家やソフィストを批判してきた、まさに同じ局面にソクラテスが立たされねばならなかったことのほうが、非常に決定的だったように思われます。もしかしたら、彼の有罪とは陪審員による投票判決によってもたらされたものであるよりも、彼が「相手がそんなにたくさんの方の人間の集まり」の場である裁判に引きずりだされねばならなかったこと自体にあり、有罪判決はそのことの可視的なしるしなのではないでしょうか。

さてゴルギアスは、こう答えます。

「弁論家というものは、あらゆる人々を相手にあらゆることについて論じる能力をもち、要するに、大衆のなかでは何を論題として選ぶとも、だれよりも説得力をもつことができる。しかしながら、だからといって、いかにそうするだけの能力があるからといって、医者たちに対しても、そのほかの専門家たちに対しても、みだりにその名誉を奪うようなことをしてはならないのだ。弁論術もやはり、闘技のばあいにもそうであったのとまったく同様に、あくまで正しく用いなければならぬ。

そしてまた、かりにある人がひとかどの弁論家となつてから、その能力と技術を用いてよからぬことをしたとしても、思うに、それを教えた者を憎んだり国から追放したりすべきではあるまい。なぜならば、教えたほうの者はそれを正しく使うために授けたのに、弟子のほうで逆の目的のために用いた、というのが実際なのだから。」

ソクラテスはこう反駁します。医者イサナの知識をもたない「弁論家が医者よりも説得力がある」と言うばあい、それは、そのことがらを知らない人が知っている人よりも知らない人々のなかで説得力をもつということになるから、「弁論術というのは、問題のことからそのものがどうであるかを知っている必要はすこしもなく、ただ、なんらかの説得のこつを見つけたし、それによって無知な人々の目に識者よりもっと知識があるように見えさえすればよいのだ」ということになる。するとゴルギアスは、「だからこそ、それは、たいへん重宝ちゆうぼうなものだということにならないかね、ソクラテス？　ほかの専門的な技術は何も知らなくても、ただこれを習っておくだけで、ぜったいに専門家たちに

ひけをとらないのだから。」と返します。語るに落ちたゴルギアスのこの談話を、ソクラテスは見逃しません。

「いったい、弁論家というものは、正と不正、美と醜、善と悪といった問題についても、やはり、健康その他いろいろの技術の対象となることがらを扱うばあいと、同じ態度でいてよいのでしょうか。つまり、何が善であり何が悪であるか、何が美であり何が醜であるか、何が正しく何が不正であるかといったことがらそのものに関する知識なしに、ただ、そうした問題についての説得法だけを工夫して、それによって無知な人々のあいだで、じつは自分はその知識をもっていないのに、識者よりもっと知識があるように見せかけるといふわけなのでしょいか。それとも、このばあいにはそうした知識が不可欠であつて、将来弁論術を学ぼうとする者は、かならずあらかじめそれを知つたうえであなたの門をたたくのでなければならぬのでしょうか。そうでないばあいには、弁論術の先生としてのあなたは、入門者に対してそうした知識はなにひとつ授けはしないけれども——それはあなたの仕事ではないわけですから——、ただ大勢の人間のなかで、そういったことがらを知らないのに知っていると思われようようにしてやり、じつさいはすぐれた人間ではないのにすぐれていると思われようようにしてやるのでしょうか？ あるいは、そういった問題に関して真実をまえて知っていてもらわなければ、入門者に弁論術を教えることはぜんぜん不可能なのではしょいか？」

こう問われると、ゴルギアスにしても、「もし知っていなければ、そうした知識もあわせて、このわたしから学ぶことになるであらう」と答えざるをえなくなり、ソクラテスの問いは急所に突き入ります。正と不正についての知識をゴルギアスから学ぶことになるのであれば、「正しいことを学んだ者は正しい人になる」し、「正しい人は正しいことをする」し、「弁論術を身につけた者は必然的に正しい人間だということになり、そして、正義の人として正しいことをおこなおうと願う」ことになり、「弁論術をおさめた人間は、いついかなるときにも、けつして不正をおこなおうと思わないはずだということにな」るとすれば、さきほど、「もし弁論家が弁論術の正しくない使い方をしたとしても、けつしてそれを教えた人を咎めてはならぬし、国から追放したりしてもならない。その咎は、不正なことをした本人、すなわち、弁論術を正しく用いない者に対してこそ向けられるべきである」と言つたことと、「話の辻褄つじまが合わぬではないか」と、ゴルギアスを更に問い詰めます。

何が善で何が悪か、何が美で何が醜か、何が正しく何が不正かといったことについての知識なしに、文章を読んだだけでわかつた気になり、「無知な人々のあいだで、じつは自分はその知識をもっていないのに、識者よりもっと知識があるように見せかける」点では、文章もまた、弁論術と全く変わらないと、ソクラテスは言っていることにならないでしょいか。